



延近 充 教授

専門:現代資本主義論

(インタビュアー:石田・古郡・三須)

『アメリカ経済、日本経済を国際政治、軍事面を含めた分析』

Q. 延近先生の専門とされている研究内容はなんですか？

アメリカ経済と日本経済及びその両国の関係を、経済学的側面だけでなく国際政治や軍事面を含めて分析することです。

なぜそんなことをやっているのかと言うと、国際政治や軍事などを重要な要因、分析視角として経済学で研究している人っていうのはほとんどいないんです。かなりユニークな分野となっています。なぜそういうことを考えたかっていうと、まあこれは後の質問で出てくる、教育理念や学生時代にも関わってくることなんだけど……

『バンドに没頭した学生時代!』

Q. 延近先生の学生時代のお話を聞かせてください

高校の3年生の夏くらいからほとんど学校に行かなくなって、バンドをやっていました。小さい時からバイオリンをやっていて中学からギターを始め、友達とロックバンドを作って、音楽だけではなく映像や詩の朗読と組み合わせたり、ストーリー性を持ったものに没頭していました。人生の意味を考え始める時期なので、それを表すものとして音楽をやっていて、高校の勉強っていうのはつまなくてね、ただ何人かの先生の授業はそういったものを考えさ

せるものだったし、議論のできるものであったから、授業には出ていたけど、それ以外の黒板にただ文字だけを書いているような先生の授業には行かなくなって、料理人のアルバイトをしながらバンドをやっていました。大学に行く意味を感じられず、大学には行く気にならなかった。

それでまあ皆にとって分かりやすい大学に入ろうと思ったきっかけは何かって言うと、僕が卒業したのがちょうど1971年で、その年の夏にいわゆる「ニクソンショック」があったわけです。さらには73年には「第一次石油危機」があって、その時はどんな意味があるかっていうのは分からなかったのだけど、世の中が激変しているっていう印象があって、まあ例えば僕は料理人のアルバイトをやってたから豆腐の値段が三倍にあがるとかね、皆さんからしたら日本史で習うような出来事が目の前で起こったわけですよ。

これは何なんだ？って、大学行ったら何か分かるかな、という気がして、慶應を受けて経済学部合格して、他の文学部とかも受かったのだけど、人に相談したら、慶應の経済学部合格したら経済学部だろって言われたこともあって(笑)、それで経済学部に入ったわけ。その当時1年生の時、最初の専門科目の授業が今で言うミクロ経済学で、授業に行ったら先生が黒板にわけの分からない数式をバーっと書いていて何のことか分からなかった。何の意味があるかっていう説明もないし、もちろん「ニクソンショック」とか現実の世界で揺れ動いていることに関する説明もないからね。経済学ってこんなつまらないものなのかって思って、結局またバンド活動に専念しました(笑)

それで1年生の時に留年してしまって、このままではまずい、勉強しなきゃと思って、2年生の時に出会ったのが今の専門のマルクス経済学。そこで出会った先生っていうのが井村喜代子先生で、僕の指導教授なわけです。経済学がどんなものかということだけでなく、世の中の仕組みがどうなっているのか、それが自分たちの生活、意識にどう影響していくのかっていうのを論じているのがマルクス経済学で、目が開かれたわけ。それが面白くて、毎回授業に出てノートをとって質問して、大学の勉強が楽しくなってきました。

ただそんな2年の終わりにゼミを選ぶことになって、卒業したら就職する

し、就職のいいと言われているゼミに入ろうとも思ったんです。ただ皆さんもご存知のように、どこのゼミだから就職がいいとかっていうのは事実上ないわけですよ。最終的には自分がやりたいことをやっている井村ゼミに入りました。で、一生懸命勉強しているうちに面白くなって、3年生の秋に、先生に「君、大学院に行く気はない？」って言われて、「あ、そういう道もあるのか」って思って、それで大学院に入るための勉強をそれこそ寝る時間も削ってやっていく中で、「あ、こういうことか」って突然何かが降りてくることがあったんです。それで大学院に行って、現在に至ります。最初から自分の望んだ場ではなかったのだけど、やってみると教育という仕事は僕の天職だって思ったんです。

僕が教えている学生が、「あ、そういうことか」ってわかった顔をしてくれるのが嬉しくて、それが何よりも喜びだったので。

「現実の社会との関係を重視」

Q. 延近先生の教育理念を教えてください

大学での学習っていうのは、すぐに役立つ知識やテクニックを覚えることに目的があるわけではなく、これから生きていく上での「基盤」を培う場所なので、誰かから与えられるのではなくて、自分から求めて形成していく場所だから、そのための手助けを最大限にしたいっていうのが僕の教育理念になります。それを具体化するために、講義においては、理論はもちろんなんだけど、現実の社会・経済との関わりっていうのを意識して、学生が興味を持てるように話すようにしています。

最初に言った僕の研究テーマの、国際政治や軍事要因を含むっていうのはどういう意味が有るかっていうと、例えばさっき言ったニクソンショックとか金ドル交換停止、なんでそんなことになったかという、アメリカが戦後すぐに圧倒的な経済力を持っていた大国だったはずなのが、わずか25年ほどの間に相対的だけど衰退して金ドル交換ができなくなったのを考えると、アメリカ

は冷戦の中で、軍拡をやり軍事政策をすすめて、世界中に軍隊を展開して行って、朝鮮戦争やベトナム戦争をやっていくことが、アメリカ経済を軍事化させて行って、財政赤字をもたらす。さらには、1971年には貿易収支が赤字になる。日米貿易でいうと、1965年に日本が黒字になって、アメリカが赤字になって行って、その激変の背景のアメリカ経済が軍事化したこと抜きには説明できない。なんでアメリカが軍拡していったかというためには、アメリカの冷戦戦略や軍事政策や経済政策を研究しないと明らかにならない。

その中でアメリカは日本やヨーロッパ諸国と同盟を組んで、日本で言うと日米安全保障条約ですね、その日米安全保障条約のもとで、敗戦国の日本は経済復興をとげて、高度経済成長をとげて、貿易収支がアメリカに対して黒字になるまでわずか20年、なぜかという、朝鮮戦争やベトナム戦争抜きにはありえない。

だから、経済だけでなく、軍事とか国際政治を考慮しないと現代の経済っていうのは明らかにできないし、分析できないっていう問題意識を学生時代から持ち続けているわけです。

学生たちにも、教えられるのが当たり前って思うのではなくて、与えられるだけでなく、常に疑問を持ちながら勉強して欲しい。「全ては疑いうる」っていうマルクスの言葉があるんだけど、僕が言っていることも全て正しいだとは限らないから、それに疑いを持って検証してみるっていうことが必要です。

『卒業生は300人近く』

Q 延近先生のゼミってどんなゼミなんですか？ ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

ゼミっていうのは勉強だけではなく、共同研究などを通して一生の人間関係を構築していく場所なので、そのためには普段のゼミだけでなく合宿や飲み会でも色々な議論をするっていうことを重視しています。その中で、人前で話

すことや自分を表現するってということなどをトレーニングしています。

僕のゼミは今年 24 期で、卒業生が 300 人近くいて、年に一度の OB・OG 会で、3 年生は三田論を、卒業生には社会に出て考えてことや経験したことなどを報告してもらっています。卒業してもゼミが続いていくっていう形になっていまして、その中で卒業生を含めた一種の共同体というものができています。

ゼミを志望する 2 年生に求めるものとしては、就職がいいらしいとかいった不確かな情報をもとにゼミ選びをするのではなくて、自分の興味を持った研究テーマを学べて、そういったことを教育してくれそうなゼミを選んで欲しいかな。

『自分が打ち込めるような研究テーマを探して下さい!』

☆2 年生へのメッセージをお願いします☆

慶應経済学部っていうのは恵まれている方なので、私の経験からすると、潜在能力はみんな持っている。だから、それを花開かせる努力をしないともったいない。花開かせるかどうかっていうのは自分次第なので、2 年生のうちにももちろん単位を取るっていうのも重要なんだけど(笑)、自分が打ち込めるような研究テーマを探してみたらいいかなって思います。

[編集後記]

穏やかな口調から、途切れることなく繰り出させる先生のお言葉は、独特のリズムで、我々インタビュアーは先生の語り口に引き込まれていった。

ちなみに先生のおすすめの本は、(先生の著書以外では・・・) 内田義彦さんの「資本論の世界」中岡哲郎さんの「人間と労働の未来」とのこと。

この記事を読まれた方はぜひ一度読まれてみてはどうだろうか。

最後になりましたが、延近先生、お忙しい中教授インタビューにご協力いただき誠にありがとうございました。

